

HIV感染者・エイズ患者の現状

知っていても、分かっていても AIDS IS NOT OVER

公益財団法人エイズ予防財団

2015年（平成27年）1年間のHIV感染者・エイズ患者の状況が、厚生労働省エイズ動向委員会から発表されました。

○新規HIV感染者報告数

2015年のHIV感染者の報告数は1,006件（前年1,091件）で、2年続けて減少しました。しかし、2008年の1,126件をピークとして、2007年以降、年間1,000件以上の報告が続いています。同性間性的接触が691件（68.7%）、異性間性的接触が196件（19.5%）と、性感染によるものが88.2%を占めています。また、日本国籍例が898件（89.3%）、男性が948件（94.2%）、845件（84.0%）が国内での感染でした。このようにわが国では、日本国籍男性の同性間性的接触による国内でのHIV感染が続いているとみられています。

また、異性間性的接触による感染者の件数は、全体の報告数が昨年より85件減少しているにもかかわらず、17件増加しています。依然低流行期にあるとはいえ、男性同性間感染への集中から、広汎流行へ移行しないよう注意していく必要があります。

年齢分布をみると、20～49歳に集中し88.2%を占めています。年齢階級別にみた人口10万対のHIV感染者報告件数の年次推移では、ほとんどの年代で罹患率が上昇傾向にあり、特に20歳代と30歳代で割合が高くなっています。もとより若者が多く感染する疾病ですが、40歳以上の各年代も上昇傾向は見られ、全世代にわたった啓発が必要です。

○AIDS患者報告数

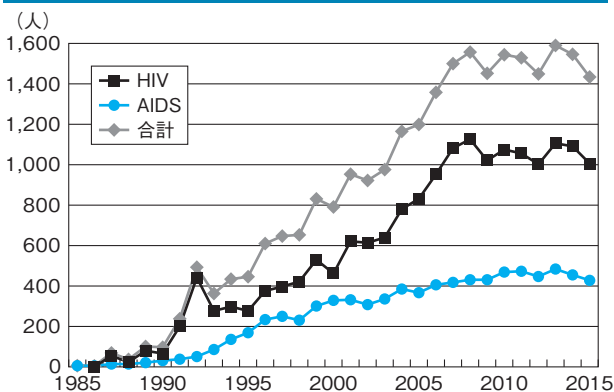
2015年のAIDS患者の報告数は428件（前年455件）で、新規HIV感染者同様2年続けて減少していますが、2006年以降年間400件以上が報告されています。

HIV感染者とAIDS患者を合わせた年間の新規報告件数（1,434件）に占めるAIDS患者の割合は2015年も29.8%と高い値を維持しており、HIVに感染しているもののAIDS発症まで診断に至っていない感染者が数多く存在することを意味しています。HIV検査の受検を促進する啓発が求められています。

○知っていても、分かっていても AIDS IS NOT OVER

これは、平成28年度世界エイズデー国内キャンペーンテーマです。治療法の進歩により、HIVに感染しても長く生きていくことが期待できるようになりました。つまり、既に多くのHIV陽性者が働き、学び、生活していることを示しています。職場や学校、医療機関など生活の様々な場所でHIV／エイズに対する差別・偏見の解消を図り、HIV陽性者が社会で安心して生活できるよう、環境を整えることが一層重要となっています。エイズはまだ終わっていない。知っていても、分かっていても、具体的な行動が伴わなければ、効果的なHIV感染予防にはつながらないのです。

日本の新規HIV感染者及びAIDS患者報告数の年次推移



年齢階級別り患率（10万対）の年次推移（HIV感染者、AIDS患者）

